

暴かれた真実。業界黙示録

「暴かれた真実・業界黙示録」は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・詐欺・摘発などをもとに構成された実録ドキュメント連載である。登場人物や店名は仮名化されているが、事件の内容は極力事実に基づき構成されている。閉ざされたホールの奥で何が起こっていたのか――いま、その真実が暴かれる。

File.12 実録・磁気さきの砂楼さろ——数千億円を飲み込んだ偽造カードの衝撃

■デジタルという名の幻想

平成八年（一九九六年）。日本経済が不況の入り口に立たされる中、パチンコ業界だけは社会と隔絶された異様な熱気に包まれていた。確変突入率二分の一、以後二回ループという強烈な射幸性を秘めた「フルスベックCR機」が、全国のホールを席卷していた時代である。

大型ホール「サンパレス（仮名）。店長の三宅（四十五歳）は、閉店後のホールで最新鋭のCR機が並ぶ島を見渡していた。

CR機と「磁気ブリペイドカードシステム」が産声を上げたのは一九九二年。爆発的な連チャン性を武器に、瞬間にホールの主役となった。

警察庁および業界団体にとって、カードシステムは単なる利便性の追求ではない。「不透明な現金商売」という世間の偏見や脱税の温床というレッテルを払拭し、資金の流れをガラス張りにして管理するための、絶対的な通行手形であった。客は券売機でカードを購入し、台間のユニットに挿入する。現金のやり取りは一点に集約され、売上管理は劇的に効率化される。それが建前

業界自身が抱える暗部による自滅である。他店の店長たちとの情報交換の中で、三宅は蔓延る狂気の実態を知る。

「深夜の店内で、悪徳ホールの経営者が自ら、偽造カードをひたすらユニットに通しているらしい」

究極のモラルハザードだった。

連日の直売り被害で資金繰りが悪化する中、広域暴力団が経営者に直接接触した。「うちで作ったカードを深夜に機械に通せ。振り込まれたカネを折半しよう」と。

裏社会の密輸ルートと、資金繰りに苦しむホールの思惑が一致し、禁断の共犯関係が結ばれた。

カード会社が決済の根拠とするのは、ユニットが読み取った「利用ログ」だけである。客が打ったかどうかを示す内部データなど関知しない。

経営者自らが不正を行う以上、ホルコンのデータを正常に見せかける無駄な労力は一切不要だった。彼らは客のいない深夜、大量の偽造カードを次々と挿入し、下皿の玉抜きレバーを開けたまま、払い出される玉をただ島の回収樋（下どぶ）へと垂れ流し続けた。

玉を出し、ただ垂れ流す。深夜の店内に玉の轟音だけが虚しく鳴り響く。遊技の原型を一切留めないその狂気じみたアナログな作業が、ホールを「巨大なデータ捏造工場」へと変質させていた。

あとは巨額の利用ログを送信するだけで、ホールの口座に何千万円という現金が振り込まれる。悪徳ホールはカード会社を

だった。

当時の磁気技術は、巨大企業たちによって「偽造不可能」と断言されていた。しかし、そのデジタルへの過信こそが、後に数千億円の損失を招く砂の楼閣の土台だったことに現場はまだ気づいていない。ホールは重いドル箱を運ぶアナログな現場だったが、決済機能という心臓部には、すでに致死量の毒が回り始めていた。

■「未打ち出し」の異常値と手口の進化

異変は、夜のレジ締めで発覚した数百万単位の「原因不明の現金不足」として突如襲いかかった。血の氣を失った三宅は、深夜の事務所ですべてホールコンピュータ（ホルコン）のデータを叩き出した。そこに現れたのは、物理法則を無視したデジタルの異常値だった。

「なんだ、この『玉貸し』と『アウト』の異常な乖離は……」

玉が払い出されれば、相応のアウト（打ち込み）が必ず計上される。それがパチンコの絶対的な物理原則だ。しかし、特定の列で

永遠に現金を吐き出す「打ち出の小槌」だと錯覚し、暴力団と共に狂ったように架空請求を積み上げていった。

■強権的凍結と八方塞がりの絶望

しかし、巨大資本が構築した決済システムは甘くはなかった。

突如として一日数千万円という利用ログを受信したカード会社のホストコンピュータは、即座に異常値としてアラートを鳴らした。「無抵抗に現金を吐き出す」と過信していた悪徳ホールに対し、カード会社は最も冷酷で強権的なカウンターパンチを放った。

「貴店の請求データには偽造カード使用の疑いがある。調査完了まで、一切の支払いを保留する」

ホールの口座への振込が一方的にストップした。本当の地獄の始まりだった。

この強硬措置は、直売りの被害に遭っていただけの善良なホールにも等しく牙を剥いた。一般客の偽造カードデータが含まれているだけで、正規の売上までもが十把一絡げに凍結されたのだ。

「真贋を判断できないシステムを作ったのはお前たちだ！」と激昂するホール。「加担していない証明ができない以上、支払えない」と突っぱねるカード会社。全国で泥沼の訴訟合戦が勃発した。

事態を重く見た警察当局も合同捜査本部を設置し、広域暴力団が結託した密輸ネットワークの摘発に乗り出した。サンパ

売上が数万円単位で跳ね上がったいるにもかかわらず、アウトはほぼ「ゼロ」だった。一発も打たずに玉を抜き取っている「未打ち出し」の異常値。自店のシステムがハッキングされ、物理的な玉が強奪されている明確な証拠だった。

原因はカードシステムの盲点、「オフライン処理」にあった。当時のユニットはホストサーバーと常に通信せず、磁気情報の書きさえ合致していれば無条件で玉を払い出してしまふ。

三宅は警戒を強めた。しかし数日後、未打ち出しの異常値はピタリと消え失せた。それなのに、夜の特珠景品の異常な在庫ペースだけが止まらない。犯罪グループはすでに、手口を「進化」させていたのだ。

三宅は防犯カメラを見返し、背筋が凍る事実に至った。犯罪グループは自ら玉抜きなどする必要がなくなったのだ。彼らが目をつけたのは、最も安全で、確実なマネーロンダリングの装置——「一般客」だった。

深夜の駐車場や周辺の路地で、来店する

レスでも私服捜査員が動いたが、制圧したのは店内の一般客ではない。深夜の駐車場で「二万円のカードを五千円で買わないか」と声をかけていた末端の売人たちだった。

だが、現場で末端を捕まえても、事態は好転しなかった。連日報道される訴訟合戦に対する世間の目は、極めて冷ややかだった。一般社会にとってパチンコ業界は依然として「不透明なギャンブル」であり、「どうせあぶく銭の奪い合いだろう」、身から出た錆だ」と突き放された。どれほどホールが存続の危機を訴えようと、社会的な同情は一切集まらなかった。

警察が末端を潰しても偽造カードは溢れ、カード会社は倒産寸前、世間は冷淡。業界は完全に八方塞がりの絶望に包まれていた。

被害の連鎖を止める唯一の手段は、システムの物理的な停止だった。

「当面の間、ブリペイドカードの使用を中止させていただきます。三宅は客の前で深く頭を下げた。現場は再び現金のやり取りへと逆行し、近代化の歩みは完全に頓挫した。

■砂の楼閣を超えて

嵐が去った後、パチンコ業界は焼け野原から、孤立無援のまま再出発を強いられた。この痛恨の教訓を経て、業界は磁気カードの幕を引き、強固な「ICチップ搭載型システム」へと舵を切る。

しかし、それは一朝一夕で成し遂げられるものではなかった。

客に「一万円のカードを、五千円で買わないか」と声をかける。

誘惑に駆られた客は偽造カードを買い取り、店内で普通に遊技を始める。大当りを目指して玉を弾くため、ホルコン上には正常なアウトが計上され、異常値など出るはずがない。

店員が島を巡回しても、そこにあるのは『普通の客が、普通に打っている』平和な風景でしかない。全国で数万にも及ぶ無自覚の「打ち子」たちが生み出され、このサンパレスの土台をも静かに喰い破っていたのである。

■狂気の轟音と「カラ回し」

オフラインのユニットを通した時点では、正規カードか偽造かを見抜く術はない。声をかければ善良な客との間で致命的なトラブルになる。見えない敵を前に、スタッフたちは自店の玉が流出していくのを黙って見つめるしかなかった。

だが、事態の間はさらに深く、絶望的に黒かった。被害が数千億円規模に爆発した最大の要因は直売りですらない。パチンコ

莫大な設備投資を、全国のホールが単独で負担しなければならない。内部に高度な演算機能を備え、偽造はほぼ不可能。全台がホストコンピュータと専用回線で結ばれ、一円の誤差も許さず監視されるネットワーク網。異常があれば即座にシステムが遮断される現在のセキュリティが完成するまでには、数年の歳月と途方もない血の滲む努力が必要だった。

数年後、サンパレスのユニットはすべて最新のオンライン仕様へと変わった。三宅は、客が当たり前のように現金を直接サンドに入れ、残高が記録されたICカードを持って自由に台を移動する光景を見つめていた。

一九九六年の狂乱、現金不足と未打ち出しの異常値。カラ回しという暴力団との共犯関係。そして、世間から見放された中での泥沼の暗闘。

それは、業界がデジタルを真に使いこなすために通らなければならなかった、重すぎる洗礼だった。現在のホールでユーザーが安心して遊技を楽しめている背景には、かつて業界を破滅の淵まで追い込んだあの日々がある。

「もう二度と、あのような砂の楼閣は建てさせない」

かつての脆弱な砂の城は崩れ去った。しかし、その瓦礫の上に、「ごまかしのきかない透明性の基盤が今の業界には築かれている。歴史は繰り返さない。ただ、痛みを伴って進化し続ける。それがあの絶望と冷たい世間の目から得た、最大の教訓なのだ。